第 15 回ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動報告

日　時：　2020 年２月７日～10 日
場　所：　フィリピン共和国首都マニラ市近郊スラム
参加者：　医師・・・・・１名　　一般参加者・・・・22 名
　　歯科医師・・・25 名　　高校生・・・・・・70 名
　　歯科衛生士・・13 名
　　歯科技工士・・２名
　　医療従事者・・７名

　　合計・・・140 名

　　現地通訳：18 名
　　現地スタッフ：約 100 名

　　現地物資配布内訳（一人につき）
　　歯ブラシ 10 本・タオル２枚・固形石鹸２個・お米２キロ　×800 人分

■　２月７日　出発　　成田空港

● AM７：００

暖冬とはいえ、天気予報では東京でも零度を下回る予想がでるほどの寒さのなか、今年も沢山の参加者の方々が成田空港第２ターミナル・JAL カウンター前に集合しています。

今年は新型コロナウィルスの影響があるのか、例年より空港内も利用客がかなり少ないように思えます。しかし、集合場所に目をやると既に 100 人以上が列をなし、皆さん事務局から手渡された「10 キロ物資」を持ち、搭乗手続きを開始していました。

今回は感染予防のため、任意ではありますが参加者の皆さんには空港内、機内等はマスクの着用をお願いしました。

● AM8：00

全員の搭乗手続きが終わり空港内の広場で朝礼が行われます。

既に手渡された「しおり」に記載されている「班」の通りに全参加者が 12 班に分かれ、先頭には班旗を持った「各班長」が座っています。今回の班長は過去参加をしてくれた OB/OG を中心に任命され、全体を大きく A/B/C の３班に分けてあります。

今回は A 班の班長には２回目の参加となる星さん、B 班には 10 回目の参加となるマナトさん、C 班にはこちらも２回目の参加となる山川さんが務めてくれます。

全点呼が確認され、広報担当のシンギさんから皆さんに挨拶がありました。彼は今回仕事の関係上どうしても参加ができず、10 年間参加をし続けた悔しい思いを皆さんに託すように活動の安全を祈ってくれました。

そして、事務局の紹介が終わり会長　林春二先生から参加者の皆さんにお願いがありました。

『今年のテーマは「思いやり」です。みんなで「思いやりの心」をもって一生懸命頑張りましょう。』

いよいよ出国手続きへ向かいフィリピンに出発します。

● 現地時間 PM１３：３０

飛行機が着陸態勢に入ると、窓の外には見慣れたマニラの街並みが見えてきました。天候は曇り、所々でスコールが降っています。

入国手続きを済ませ各々が荷物と 130 個を超える物資袋を取り終えると、空港出口ゲート前で今日の活動の最終確認が行われます。

ここからは現地統括責任者の今西先生が中心となります。

外ではすでに３台の大型バスと３台の中型コースターが待機し、全員で協力しながらバスに荷物を詰み込みます。

今日は物資配付活動に向かいます。A/B のバスにはそれぞれ事前に振り分けられた全高校生と初参加の方々が乗り、C のバスにはホテルにて器材準備等を行う方々に分かれ、それぞれ出発します。

今年もマニラ警察の白バイ隊員の皆さんが先導をしてくださり、渋滞を避けいち早く会場に到着できるようにお手伝いをしてくださいました。

● PM１４：１５　　物資配付活動

ここはマニラ市でも中心部にある「都会の中の貧困地区」です。以前のような大規模なスラムは解体され今では約 200～300 人程度の小規模なスラムが点在するようになりました。

　ここでは 200 人の住民を対象に「歯ブラシ 10 本、タオル２枚、固形石鹸２個、お米２キロ、カップ麺、スープの缶詰」などを一つの袋に入れ、高校生が一人ひとりに手渡しをしました。

器材準備

ホテルへの先発隊となった方々は中型コースターに詰め込まれた全員の荷物、物資を手分けして運びます。そしてこのホテルの倉庫に一年間無料で保管してもらっている活動器材をあらかじめ予約をした私たちだけが使用できる「器材部屋」に運びます。

その数は大変な量です。器材係の戸田先生の指示のもと一つひとつのケースを開け、中身を確認し、すべての機械が正常に可動するか確かめていきます。

また、明日から２日間使用する物資の総数を確認し合います。

歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士、歯科助手らがそれぞれのブースに分かれ準備が始まりました。経験者の方々が初参加の方にもわかるように丁寧に教えてくださっています。

● PM１６：３０　　マニラ全体会議

物資配付班がホテルに到着し「マニラ全体会議」が始まります。

今年度の現地活動参加を募集してから、全員が顔を合わすのが実はこの時が初めてとなります。高校生は各支部で研修を行い、一般参加者の皆さんは 12 月に開催される「一般参加者のための事前研修会」でお会いしますが参加者全員が揃いお互いが自己紹介するのはこのマニラのホテル内で行われる会議が初めてとなります。

１班からそれぞれ自己紹介が始まりました。高校生たちは出発前、各支部でおこなわれてきた事前研修の通り元気な声であいさつをしています。

明日から全員が心を一つにしていよいよ医療活動が始まります。

● PM２０：３０　　高校生ミーティング初日

３泊４日の活動中、毎晩約１時間 30 分、「高校生マニラミーティング」が開催されます。

これは毎年「夢」をテーマにそれぞれが活動で感じたことや、将来の夢などを自由に挙手で語りあう会議です。これは答えを求めるのではなく、自分自身の考え、思いをしっかりとみんなの前で語ることで、今までの自分を変え、殻を破り、「夢」を見ることの素晴らしさを学ぶことを目的としています。

器材確認

会議室で高校生ミーティングが行われているころ、器材部屋では医療関係者の方々が明日から始まる器材の最終確認を行っております。今回はマニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブよりハロアル専用の滅菌機が贈呈され、より正確な器具の消毒、滅菌が可能となりました。

■　２月８日　活動２日目　医療活動初日

● AM６：００

朝食会場には既に鮮やかな色のハロアルＴシャツを着たメンバーたちが沢山集まっています。

「おはようございます。」と高校生たちの元気な声があちらこちらで聞こえてきます。

器材部屋からは担当メンバーが今日使用する器材、物資をバスに運んでいます。

そして医療従事者だけのミーティングが行われます。

会長より皆さんにお願いがありました。

「普段やっていること以外はできません。無理をせず心を込めて治療してあげてください。

日本とは違う診断、治療でもここではそれが最善だと判断して皆さんにお願いをします。それを信じて彼らのために精一杯尽くしましょう。もし何かあったらいつでも私や団長、今西先生に声をかけて、みんなで助け合って治療をしていきましょう。」

バスの前には既に先導をしてくれる白バイ隊員が待機しています。

全ての荷物が積み込まれ３台の大型バスに全員が乗ったのを確認し、いよいよ出発です。

● AM7：４５

朝方降った雨も止みましたが、今日は一日不安定な天気となるため、急遽予定していた場所から数分の所にある「セイント・アンソニー・スクール」をお借りすることになりました。

この日は土曜日となるため学校もお休みとなり、大きな教室を自由に使うことができました。

バスが到着し、一斉に器材を運びます。高校生も大人もみんなで協力をし、事前に今西先生等が治療導線を決めてくれた通り手際よく治療ブースが作られていきます。

活動対象地域「バランガイ７２４」

ここには約 3000 人の人たちが住み、バイクタクシーや物売りなので生計を立てています。
一日約 700 ペソ日本円で 1500 円弱の収入で、一日二食。
もし病気になった場合、無料の診療所はあるものの、そこには研修中の若い医師しかおらず、診療所内の薬はとても高価なのでなかなか買うことができません。
そして、歯が痛くなった場合、無料の診療所はなく町の診療所に行きますが、一回の治療で 1,000 ペソ程度、約２日分の収入がかかってしまうため、ほとんどの住民は歯の治療を受けることができません。

● AM９：００　医療奉仕活動開始

すべての準備が整いました。
受付、問診ブース、抜歯ブース、保存ブース、技工ブース、クリーニングブース、耳鼻科ブース、消毒ブース、投薬ブース、シャワーブース、誘導係、物資配付係。

すでに受付ブースには早朝から治療チケットを手にした地域の住民たちが列をなし、問診票に名前や年齢を書き込み始めています。

現地統括責任者の今西先生の号令でいよいよ治療が始まります。
高校生たちも各担当ブースに分かれ先生たちの指示をしっかりと聞いているようです。
恒例の掛け声「ハローーー！アルソン！！」
今年の活動が始まりました。

受付ブース「神様のチケット」

ここは活動の入口となる大切なブースです。ここではまず事前に配付された「治療チケット」を確認しそのチケットを持った人だけが治療を受けることができます。
これは数か月前から地元バランガイ（集落）やロータリークラブのメンバーがその地域の貧しい家庭を調査し１家族１名を基本に治療チケットを配っていきます。そのためチケットを持たない人は残念ですが治療を受けることはできません。これは治療の公平性を保つと共に、暴動などの活動の安全を確保する上でとても重要になります。
このチケットを現地の方々は「神様のチケット」と呼びます。一生のうち最初で最後かもしれない無料の治療と薬を手にすることができ、クリーニングや歯ブラシ指導、耳鼻科の治療や入れ歯まで作ってもらうことができるチケットはまさに神様からの贈り物だと皆さん口々におっしゃいます。

問診ブース

ここではまずカルテに記入された年齢や主訴と言われる「患者さんが最も希望している治療」を確認します。このブースでは活動中訪れる全ての患者さんをチェックするためそれぞれの先生方が通訳を介して注意深く診断をします。
患者さんの主訴は様々です。基本的には患者さんが希望される治療を優先し、こちらから無理に勧めることはありません。しかし、痛みや大きな感染があり今後更なる悪化が考えられる場合は実際に鏡で見てもらいながら丁寧に抜歯の必要性を説明することもあります。

もちろん日本では治療できる歯です。そのような時は本当に心が痛みます。

そしてこのブースで最もつらいのがまだ小さな子供たちが痛みがあるために「先生、歯を抜いて」と無邪気に訴える瞬間です。私たちの力足らずで今目の前の子供が大切な歯を失ってしまう決断をするとき私たちは本当に涙を堪えます。

物資配付ブース

問診ブースを通ると次に物資配付ブースに行きます。そしてタオル、歯ブラシ、固形石鹸などを一つにした物をプレゼントし各治療ブースに向かいます。

ここでは主に一般参加の大人の方々が中心となって数千本の歯ブラシ、数千枚のタオルを仕分けしながら一人ひとりに笑顔で手渡してくださいました。開始から終了まで本当に地道な作業を皆さん快く引き受けてくださり、スラムの方々もとても喜んでいました。

患者誘導

物資を手渡されるといよいよ治療会場に入ります。しかし、会場は大変混雑しており、患者さんたちもいったいどこに行っていいかわかりません。そのためここでは担当となった方々がカルテを確認しながら直接患者さんを治療ブースの待合席まで案内します。不安げに歩く子を勇気づけながら手をつなぎあい歩く姿がとても印象的でした。

保存ブース

このブースは「虫歯を削り詰め物をして治すブース」です。
この活動が発足した 15 年前。今まですべて抜歯しかできなかった治療をできるだけ日本のように歯を残してあげたいとの思いから、たった 2 台の往診治療器具を日本から持参し、右往左往しながら現地で治療をしていたのを思い出します。
あれから 15 年、今では 9 台の機械が設置されそこには空気のでるコンプレッサーまで使えるような配線を組むことができました。
黒くなった歯、まだ抜かないでも十分使える歯が白くきれいに蘇ります。

抜歯ブース

痛みを取る最終手段である治療。それは抜歯です。慢性的な栄養不良のスラムの子供たちの中には虫歯の菌が全身に影響を及ぼし死亡してしまう場合も少なくはありません。その為日本では治療できる歯もここでは抜歯をせざるを得ません。
幼い子供たちが次々と大切な歯を失っていきます。
ある 10 歳の男の子です。右下の奥歯「第一大臼歯」を抜かなければなりません。これは 6 歳臼歯ともいわれ大人の歯のなかで最も早く生え、噛み合わせや身体の成長や脳の発達にも大変重要な歯です。
しかし、彼の歯はすでに虫歯で崩壊しており、強い痛みを訴えています。彼は躊躇することなく抜歯を希望し治療を受けています。
高校生たちが先生の手元を照らし、頭を押さえ、そして震える手を握りしめています。
抜歯後、安堵したのか涙目になりながら血の付いたガーゼを噛み「サラマッポ・ありがとう」と微笑みます。
治療会場内で唯一、涙がこぼれる悲しいブースです。しかし、これが今できる私たちの最善の選択だとみんなが信じ、また一人、また一人と歯を抜いていかなければなりません。

クリーニングブース

ここは歯科衛生士さんたちが主役であり、最も人気のあるブースです。食後きちんと歯を磨く習慣がないスラムの人たちに正しい歯磨きのやり方を身振り手振りで伝え、高校生たちは日本からそれぞれが現地語で作った歯磨き絵本を片手に歯の大切さをお話します。そして、今まで誰かに自分の歯をキレイにしてもらったことなどないスラムの人たちは、本当にうれしそうに待合席で並んでいます。

歯科衛生士さんたちも日本とはまるで違う環境にも関わらず、みんな本当に楽しそうに活動をしています。もう二度と会うことができないスラムの人たちに精一杯の治療をする。「一期一会」ボランティアをしながら私たちの方が日々の忙しさで忘れかけた医療人としての本当の在り方を学ばせていただいているようでした。

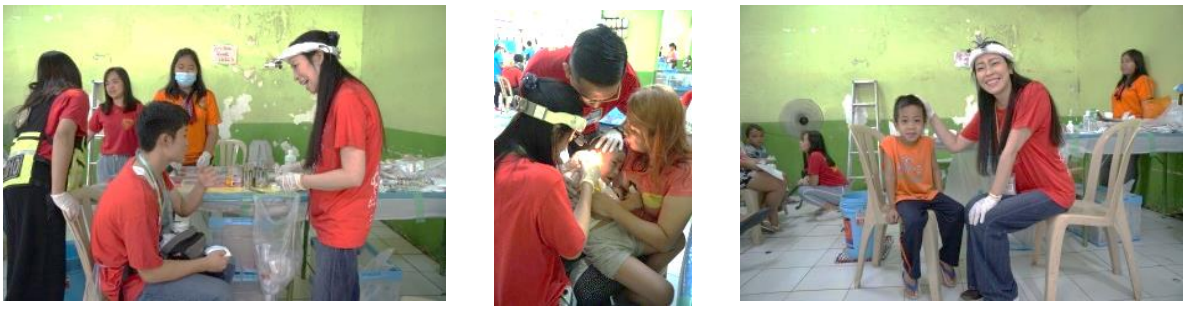
技工ブース

ここは入れ歯を作るブースです。今回は２名の歯科技工士さんが参加をしてくださいました。一日しか治療日がない現地では入れ歯の形採りから完成まで、特別な材料や日本での準備がとても大切になります。また、活動時間が限られているため毎年歯科技工士の皆さんは昼食の時間を削ってまでも黙々と作業を進めてくださいます。
入れ歯は現地の人たちにとって大変高価なものです。たとえ痛みを取るために抜歯をしたとしても最後まで入れ歯を入れることができる人はほとんどいません。
その為何十人もの人たちが入れ歯の製作を希望されますが、全てを受け入れることはできません。先着順、そしてお口の中の状況を確認したうえで最終的に判断をせざるを得ません。まさに神様のチケットを持ち、早朝から並び幸運にも入れ歯を手にした人たちは涙を流すように喜んでくださいます。そして、最後はいつも担当した歯科技工士さんたちと記念写真をとり、満面の笑みで帰宅していくのです。

耳鼻科ブース

ここは耳鼻科　木村医師のブースです。スラムでの生活は大変不衛生な環境のため耳の中に日本では考えられないような埃や感染が見られます。それを先生は丁寧に除去し洗浄し一人ひとりに説明をしていきます。

また、医師の参加は先生お一人ですので、活動中、参加者の体調管理も行わなければなりません。患者さんたちの年齢もまちまちで症状が酷い場合、また、その他の疾患を有する場合は先生の判断でマニラチームと連携して近隣の医院の受診を促し、その費用も現地チームが負担をし、一人でも多くの人たちの笑顔のために頑張ってくれました。



シャワーブース

今年で４年目を迎えたこのブースは 12 歳以下の子供たちを対象としています。
子供たちは普段、きれいな水を使い、石鹸やシャンプーなどで体や髪の毛を洗うことはできません。
スラムでは水は貴重な存在です。そのエリアに井戸や上水道があればよいですが、その水さえ飲料水として使用できません。その為まず彼らは日々の生活水を購入しなければなりません。その水を飲料水として使い、食事、洗濯、食器洗いなどに使用します。では彼らはどうやって体を洗うでしょう。それは雨水をタンクに貯蔵し使ったり、子供たちなどは川や海に入り汚れを落としたり、雨が降れば一斉に外に飛び出し雨どいから流れる雨水で体を洗うのです。
それを知った私たちはたった 1 日かもしれませんが子供たちに清潔な体になって欲しいと願いこのブースを始めました。ここでは一般参加の方々を中心に高校生も参加をします。男子生徒は男の子、女子生徒は女の子を担当します。
ある高校生はあまりのスラムの子供たちの汚れに驚き、いかに日本が恵まれているかをあらためて気づいたと語ってくれました。

消毒ブース

このブースはもしかしたらこの活動の中で最も危険で大変なブースかもしれません。

ここでは活動中に使用する医療器具のすべての消毒、滅菌を行います。

主に歯科助手の皆さんが担当してくれますが、鋭利な器具、麻酔針、血液のついた物などを取り扱うこのブースはどんな感染の危険性があるかわかりません。また、活動中ずっと立ち続け何百回と器具を消毒滅菌しなければなりません。

また、各ブースではそれぞれがスラムの人たちと触れ合う機会があるのに対し、終始器具の準備をしなければならないこのブースはいわば活動の中心部でありダイナモの役割を担う大切なブースとなっています。

投薬・カルテ回収ブース

すべての患者さんが最後に訪れるブースです。神様のチケットを持ちそれぞれの治療を受けた患者さんは最後にこのブースでお薬をもらったり、体調の変化を確認したりします。
特に抜歯後に処方されるお薬はお一人おひとりにお薬の飲み方を事前に用意された現地語での説明書を用いて説明していきます。
中には出血が止まらなく不安や違和感を訴える方がいれば、カルテを確認し担当した先生に再度連絡をして治療の是非を判断してもらいます。
また、カルテをすべて回収しその日の活動内容を集計するためにもとても大切なブースであり、ハロアルの最後の出口となるため、皆さんとてもやさしい笑顔で見送ってくださいました。

● PM１５：００　　医療活動終了

最終患者さんの受け入れが調整され今日のすべての活動が終わろうとしています。
歯科技工士さんたちの努力により最後の入れ歯希望の患者さんの調整が終わりました。

各ブースではすでに後片付けが始まりました。

今年の医療活動初日が終わります。

最後、ハローアルソンのメンバーと地元ロータリークラブのメンバー、地域のバランガイのスタッフたちと一緒に記念撮影です。

みんなとてもいい笑顔で笑っています。

明日は更に貧困レベルが高い地域での活動となります。

皆さん本当にお疲れさまでした。また明日がんばりましょう。

● PM２０：３０

高校生マニラミーティング

昨日の高校生ミーティングでは、皆緊張をしていたせいかなかなか手が上がらず発言が少なかった印象でしたが、今日の医療活動を体験したからか、開始から皆一斉に手を挙げています。

それぞれが思い思いの気持ちや夢を語る姿は昨日とはまるで別人のようです。

そして、今日のミーティングでは高校生たちにご両親からの「手紙」を渡しました。
これは事前に高校生たちには内緒で親御さん等に書いて頂きました。
一人ひとりに手紙が手渡され、しばしの時間その手紙を静かに読んでもらいました。
会場では高校生らのすすり泣く声が聞こえてきます。

今の自分が生きられること、今日のこの場にいることができること、そして夢を見ることができること、すべてが両親、家族の支えのおかげであることを改めて感じながら、高校生たちは静かに手紙を読んでいました。

● PM２２：３０

本日のすべての活動が終了いたしました。器材部屋ではすでに明日の準備が整い、担当者が最終確認をしています。

高校生たちも皆部屋に戻り、明日の活動に備えます。

明日はいよいよ医療活動最終日です。

■　２月９日　活動３日目　医療活動２日目

● AM6：００

昨日の夜に降り続いていたスコールもあがりました。毎年この時期は「ドライサマー」
と呼ばれるくらい雨が少ない時期でしたが、今日も少し雲がかかり、天気は不安定なようです。
既に今日の器材・物資運搬の担当者たちがバスに荷物を積み込み始めていました。
今日訪れる地域はフィリピンでも最大の貧困層地区といわれる「トンドエリア」です。

活動対象地域「トンド地区　ドン・ボスコ・ユース・センター」

場所はマニラ市内から車で約 40 分、トンド呼ばれるこの地区は以前、ゴミ捨て場「スモーキーマウンテン」が存在していた地域です。当時フィリピンでは日本のようなゴミの焼却システムがなく、分別もあまりされていないため、発生したゴミのほとんどが埋め立てられていました。特にこの「スモーキーマウンテン」は首都マニラ市から毎日数千トンのゴミが運ばれ、プラスチックや鉄くずなども一緒に捨てられることから、いつしかそのゴミが山となり、ゴミ同士が化学反応を起こし噴煙をあげることからこの名が付きました。

ここは別名「地図に載らない地区」「フィリピンの恥部」とまで言われ、そのゴミの中からお金に換金できるものを拾い生活をする「スカベンジャー」と呼ばれる人たちがゴミ山を中心に集落を作り、当時はスカベンジャーだけで２万人とも３万人と言われる人たちが住んでいました。

現在ここは封鎖され別のエリアに移動となりましたが、ここはマニラ湾にも近いことから現在では造船業や漁業の町となりつつありますが、いまだにここを拠点としてマニラ市内にゴミを拾いに行く人たちも数多く存在しています。

今回、その中でも「poorest of the poor」「貧困の中の最貧困層」と呼ばれるエリアを対象としました。

ここでは約 18 万人が暮らし、うち、大人８万人、子供 10 万人が生活をしています。

主に、彼らはバイクタクシーやごみを拾い生活をするスカベンジャーを生業とし、一日約２００ペソ日本円で約 400 円程度の収入です。ここにも無料の小さな診療所はありますが、診療は週に 2，３回程度で歯科治療は受けることができません。そのため、安い痛み止めや漢方を買って痛みを抑えるだけです。

また、以前よりは改善されてはいますが、やはり犯罪や麻薬が横行し、とても危険な地域とされ、現地の人たちでさえも立ち入ることが恐怖と話す人もいます。

今回はその地域の「ドン・ボスコ・ユースセンター」と呼ばれる教会内にある大きな広場を治療会場としました。

周囲には警察、地元バランガイのメンバー、そしてマニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブのメンバーが警備をしています。

既に会場周囲には沢山の患者さんが私たちの到着を待っていました。

● AM9：00

各ブースの配置が完成し、活動の準備が整いました。現地統括責任者今西先生より団長の私に一言挨拶を求められました。

「皆さん。今日が今年の医療奉仕活動最終日です。最後まで一生懸命やりましょう。ボランティアに成功も失敗もありません。ボランティアは目の前の悲しみに心から寄り添う行為、ただそれだけです。そして私たちには決して事故や怪我などは起こりません。それは私たちはボランティアの神様に守られているからです。どうか心を一つにして頑張りましょう。」

ボランティアの神様・・・15 年前、初めてこの活動を立ち上げ参加したとき、会長林先生がおっしゃった言葉です。私はその言葉を聞き、心振るわせました。非科学的、あるいは宗教的と思われるかもしれません。しかし、私は 15 年間この活動に携わり、確かに私たち人間では到底理解することができない数々の不思議な力の存在を感じてきました。

その言葉を今、私が皆さんに投げかけ、日本から多くの期待をしてくださる方々の思いを託しました。

いよいよ今年最後の医療奉仕活動が始まります。

壮絶抜歯ブース

歯は人間が毎日を楽しく食事をし、健康で長生きするため必要な大切な臓器、歯臓です。
歯を抜くというのは単に噛めなくなるというだけではなく、命にも繋がるとても重要な治療になります。
しかし、このスラムでは様々な理由から日本では治せる歯も痛みをとる最後の手段として抜歯をしなければなりません。

治せる歯。つまり到底抜く必要のない歯は歯根も周りの骨もとても頑丈で、沢山の経験を積まれた先生方も大変な苦労をします。そのため、一人の先生では抜歯できない場合もあり、多くの先生方のお力をお借りして抜く場合もあります。

頭を抑え、体を抑え、顎を抑え、抜歯をします。高校生たちがライトを照らし、周りにはすでに何人もの人たちが治療を見守っています。

スラムの患者さんも加えられる力に必死に耐えています。高校生たちは祈るような目で見つめています。

ようやく歯が抜けました。成功と安堵感で先生も患者さんもみんなが笑顔で称えあっています。しかし、私は高校生に言いました。「安全に抜けたことはとても良いことでしょう。しかし、本当はとても悲しい治療をしていることを忘れてはいけない。」

血の付いたガーゼを噛みながら「サラマッポ・ありがとう」と言いながら患者さんが帰っていき、また一人抜歯ブースに患者さんがやってきます・・・。

● PM１２：００

昼食の時間となり、各ブースも午後の準備をしながら片付けを始めています。

今年から昼食は各班で頂いてもらうこととなりました。班長を中心に高校生リーダーが班員のお弁当を取りに集まっています。

ひと時の休息の時間です。今年は例年よりも気温が低く、また会場も大きなホールを利用していることから暑さの問題はなさそうです。

午後からはスラム見学も行われ、いよいよ今年最後の医療奉仕活動が始まります。

● PM１３：００

最後の医療奉仕活動、スラム見学

今回のスラム見学は新型コロナウィルスの感染予防なども考慮して、希望者のみ参加を募りました。

現地統括責任者今西先生の号令で医療奉仕活動と並行して順番に見学に行くのですが、なんとほとんどの参加者の皆さんが見学を希望されました。

住民たちの居住区に入ると、とても狭い路地には上に伸びた何世帯が住む石やコンクリートでできた家々が立ち並び、その間には無造作に無数の電線が張り巡らされています。

また、所々にお菓子や飲みもの、雑貨などを売っている小さなお店があります。これは「サリサリストア」といって現地では手ごろな値段で買える小売店です。

特にスラムの子供たちは日本のように定期的な食事をとることができないため、安価で食べることができる「お菓子」をよく食べています。その為さらに虫歯になる可能性が高くなることも彼らのお口の中の悪化に影響します。

● PM３：３０

最終患者さんの受け入れが始まり、今年の医療奉仕活動も終わりを告げようとしています。

最後の患者さんは「技工ブース」の入れ歯の患者さんでした。

通常、日本での治療であれば入れ歯が当たっていたり、何か不具合が出れば当日や翌日でも調整ができたりしますが、ここではそれはできません。せっかく作った入れ歯も痛みがあればその日の食事もとることができません。そのため、念入りに調整が必要となります。

医療奉仕活動終了

すべての治療が終わり、器材も片づけられ、全員が会場に集合しました。そして、会長から労いと感謝の言葉が述べられると、マニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブの代表ニナさんから私たちへ感謝の挨拶がありました。

そして恒例の記念撮影です。

この活動に携わったすべての人たちが今集合しました。会場には雨も上がり、世界一ともいわれるマニラの夕焼けが差し込み始め、柔らかな心地よい風が吹いています。

国境を越え、人種を超え、みんなが「誰かのために」という志一つで人はこんなにも笑い、称えあい、感謝しあうことができます。

今年の医療奉仕活動がすべて終了いたしました。

● PM２０：３０

最後の高校生マニラミーティング

今年最後の高校生マニラミーティングが始まります。

３日間の活動を終え、両親からの手紙をもらい、様々な思いが交錯している彼らにとって今日が最後の発表の場となります。

開始早々、一斉に手が上がり、それぞれがそれぞれの思いを語ってくれました。

最後に会長　林先生から高校生たちに感謝と未来へのエールが送られ今年の高校生マニラミーティングが終了しました。

この詳細は別冊子にてご報告いたしますので、どうぞこちらもお読みください。

● PM２２：３０

高校生たちが各部屋に戻っていきます。途中数名の高校生たちと一緒になり、私は尋ねました。「どうだった？ハロアルは楽しかったか？」彼らは満面の笑みで答えてくれました。

「団長、私は絶対来年も参加します！」

その笑顔はたった３日前、成田空港で見た幼い日本の高校生とは別人のようです。

今年もスラムの人たち、フィリピンの人たち、そして多くの支援者の皆さんのおかげで、素晴らしい活動となりました。

■　２月１０日　活動最終日　物資配付活動

● AM７：１５

朝食や荷物がすべてバスに積み込まれ、これからチェックアウトルームにて最後の朝礼が始まります。

会長より全参加者にお礼の言葉が送られました。

また、今回、高校生たちはホテル到着時から今まで携帯電話を会が預かっていました。

これは、子供だけではなくもはや日常生活において携帯電話はなくてはならない生活用品となっています。それは単なるコミュニケーションツールとしてではなく、災害時や緊急時、また様々な情報を得るために欠かせないものでしょう。

しかし、その便利さは時に人間が本来持つ温かさや不器用さ、探求心や相手を思う気持ちなど、当たり前の感覚を麻痺させ、それが在るが故に自分と同じ価値観の世界だけにとどまり、若者たちの可能性を奪ってしまうこともあります。

４日間ではありますが今までの日常を離れ、同じ志を持つ同世代の高校生たちが昼夜を共にするならば、携帯電話など忘れ、目を見て耳で聞いて、心で繋がりあう努力こそが、これからの彼らにとって大きな糧になると考え、今回このような約束事を事前に伝え了承してもらいました。

もちろん、緊急時にはいつでも現地メンバーと連絡がとれるように手配はされておりましたが、幸いこの４日間で１本の電話も保護者の方や学校などからいただくことはありませんでした。

● AM8：30

ホテルを後にし、いよいよ最終活動となる物資配付活動に向かいます。場所は車で約１時間、カビテ市にあるBarangay Banalo,City of Bacoor,（バランガイ バナロ　バコオル）です。

今回この場所は初めて訪れる地域で、住民は約 15,000 人、約 700 世帯です。１家族子供が６～8 人で 10 年前まではほとんどが漁師をしていましたが、埋め立てにより職を追われ、工場などに働きにでています。

ここでは高校生たちが歯ブラシやタオル、固形石鹸、お米をお一人おひとりに配付いたしました。

ここは初めての活動場所でしたが皆さん快く迎え入れてくださり、今度は是非、治療のミッションをやってほしいと皆さんおっしゃっていました。

感謝を込めて

今回で第 15 回目となるハローアルソン・フィリピン医療ボランティア現地活動も皆さんのおかげで素晴らしい活動になりました。

出発前、ルソン島西部で発生したタール火山の噴火や新型コロナウィルスの問題など、参加者の皆さんやご家族、ご父兄の方々や学校関係者の皆様には多大なご心配があったことと思います。

会としては 1 年間をかけ現地チームとの密な連携により万全の準備を行ってまいりましたが、全参加者が心を一つにしまさに「ONE TEAM」となって最後まで頑張ってくださったお陰です。

特に私個人としてとても嬉しかったことは、今年は多くのハロアル OB・OG の方々が参加をしてくれたことです。

彼らは高校生の時にこの活動に参加をして「いつかもう一度今度は大人になって戻ってきます。」と高校生ミーティングで宣言してくれた人たちでした。

その彼らが時を経て、大学生となり、社会人となり、今度は高校生を見守る側として新たな仲間に加わってくれたのです。

その中でも 2010 年度に参加をした第 9 期生の湯川さん、塚本さんは私の中でも大変心に残る高校生でした。

彼らは住む場所も学校も違う者同士で、偶然にもこの活動で一緒になりました。

まだ高校生マニラミーティングがきちんとした形になっていなかった時代、当時参加をした高校生は 25 名でした。

その年、会長 林春二先生が脳幹内出血で倒れられ、会長不在のまま現地活動が行われた年でもありました。

そして、活動終了後、なんとなしに高校生全員が一つの部屋に集まり、私を含め現地統括責任者今西先生等と共に、現地活動の感想を聞いていた時、一人の生徒が「ストリートチルドレンにお金をあげるべきか、どうか」という議題を投げかけ、そこから高校生たちの熱い論議が行われたのです。

今思えばそれが「高校生マニラミーティング」の始まりだったかもしれません。

その時その議題の中心にいたのが湯川さんと塚本さんでした。彼らは私が見る限り真逆のような性格であり、片方は「気持ちはわかるけど規則なのだからお金をあげるべきではない」と否定的な考えを述べ、片方は「目の前にあんなにかわいそうな子供がいるのだから、規則なんて関係ない」と言い、お金をあげる肯定派でした。そして周りの高校生たちもその議題によって自分の考え方を言い合い、お互いの意見を聞きながらも若者らしいとても意味のある時間を過ごしたのです。

もちろん、この議題に答えはありません。大切なのは自分たちが何を感じ、何を悩み、どんな行動をこれからするかということを私は彼らに話しました。
あれから 10 年の月日が経ちました。

そしてなんと彼らはその後親交を深め、お互いいつか一緒にもう一度この活動に戻ろうと話し合い、今年二人で参加をしてくれたのです。

私は本当に嬉しく思いました。しかしそれだけではありませんでした。後日、高校生担当の大関さんからの報告で、私たちが知らないところで彼らは就寝前、高校生たちの部屋に行き、体調の変化はないか、何か問題はないか、聞いて回ってくれたそうです。

その理由を聞くと「僕たちが高校生の時に団長や色々な大人たちがやってくれていたことを今度は僕たちが彼らにやってあげるのが仕事だと思います。」

私は帰国後その話を聞き、本当に胸が熱くなりました。そして、10 年前彼らの心の中に芽生えたハロアルの種が今こうして立派に成長してくれたことに改めてボランティアの素晴らしさを感じると共に、彼らにきっかけを与えてくれたフィリピンの恵まれない人たちに心から感謝しました。

また、今回は新たな試みとして、高校生たちの携帯電話の預かりを行いました。

8 月に行われた高校生担当者会議で初めてこの案が出た時はどのような反応になるか予想ができませんでした。しかし、活動後、多くの高校生たちから、「携帯なんていらないかも・・」「携帯がなくても全然大丈夫」などという声も多く聞かれ、彼らにとってとても貴重な時間を過ごしてもらうことができました。

この活動は 15 年前、わずか 20 名にも満たない人数とたった 3 名の高校生から始まりました。

目の前の患者さんのため、目の前の痛み、苦しみのため、そしてスラムの人たちの笑顔のためというハロアルの志は今、確実に 15 年後の高校生たちに受け継がれています。

これもひとえに、共に現地に行き汗を流し、共に喜びや悲しみを分かち合った仲間の存在と、全国の支援者の方々のお陰です。

皆さんには心からの感謝と、共に来年もまた素晴らしい活動になるよう、会一同全身全霊で取り組んでまいります。

どうか今後ともご協力のほど　よろしくお願い申し上げます。

ハローアルソン・フィリピン医療を支える会

団長　　関口　敬人

物資配布

	２月7日	2月１０日	計
物資配布	２００名	６００名	８００名

医療奉仕活動

	２月8日	２月9日	計
クリーニング	１９７名	３６３名	５６０名
保存	９０名	８７名	１７７名
抜歯	１５０名	１７７名	３２７名
義歯（入れ歯）	５名	７名	１２名
耳鼻科	５６名	９７名	１５３名
シャワーブース	７７名	３００名	３７７名
投薬のみ			
合計人数	５７５名	1,０３１名	1,６０６名